

# 和本を知って残そう，使おう

## ～保存と利用と取り扱い～

---

### 【基調講演】

和本に親しむーその種類と特徴についてー

佐々木孝浩（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）

---

#### はじめに

東アジアにおける日本の古典籍の大きな特徴は、他の国々に比して種類が豊富なことである。そのことは理解の難しさにも繋がっているが、そうなった理由やその特長の具体相を知れば、日本古典籍の面白さが理解でき、親しみやすくなるはずである。

和本の種類豊富なことは、非常に多面的であるが、ここでは基本構造である装訂と、形と大きさを主対象とし、併せて和本理解で問題になる諸特性を説明したい。

#### 様々な装訂と保存される内容

江戸時代以前には、様々な構造の和本があったが、基本となる装訂は5種類である。それらはすべて中国で生まれ、順次日本に伝わったのであるが、中国や朝鮮半島では唐代に始まった印刷が宋代に普及して、印刷に最も適した「線装（和名：袋綴）」が他の装訂を淘汰することとなったのに対し、写本の時代が長かった日本では、複数種が同時並行的に用いられたのである。その5種類とは、異説もあるものの渡来順で示すと、

- 1 卷子装（かんすそう）
- 2 折本装（おりほんそう）
- 3 粘葉装（でつちょうそう）
- 4 綴葉装（てつようそう・列帖装れつじょうそう）
- 5 袋綴装（ふくろとじそう）

となる。紙をまとめるのに、1～3は糊を用い、4・5は紙縫・糸を用いる。3～5が「冊子本」と呼べるものであり、3・4は紙の両面を使用するもので、1・2は裏面を用いることもあるが、5は構造的に表面だけの利用となる。

目的を同じくする道具に複数の種類がある場合、必ず使い分けが行われているものである。それぞれの構造に

ついては、参照物も多いのでここでは省略し、主に使い分けの傾向について確認してみたい。

卷子装は紙を使った最も古い装訂であり、日本に最初に伝わった書物の形態である。最も権威ある装訂であり、漢字文献では普通に用いられた。格の低い文字である平仮名の文献では、内容を選ぶ傾向があり、和歌や事実に基づく物語類は保存されたが、創作的な作品は、仏教的観点から嫌われた。一方図や絵は卷子装に保存されるものであった。

折本は卷子装より扱いやすい装訂として、仏教経典や系図類、書道の手本やガイドブック的なものにも用いられたが、書道手本を除いて文学作品が保存されることは稀だった。

粘葉装は、空海が中国より伝えたことが明らかな東洋最初の冊子体である。平安時代には漢字・仮名を問わず利用されたが、ばらばらになりやすく、虫損を被りやすいことなどが嫌われて、鎌倉時代以降はほぼ仏書に限定されるようになった。

綴葉装は、粘葉装に替わって冊子の代表的な存在となり、江戸時代に至るまで様々な分野で長く用いられた。糸が切れるとばらばらになる欠点があった。製作時の紙の折り方によって、長方形の四半本と正方形の六半本とがあり、鎌倉・南北朝期に限定すると、和歌は四半本に、物語は六半本に保存される傾向が認められる。

袋綴は平安時代からの使用は認められるが、本格的に広く用いられるようになるのは室町時代ころからである。江戸時代に商業出版が定着すると、版本の主たる装訂となり、写本共々爆発的に使用が増えていく。内容を選ばない装訂でもあった。

使い分けをより深く理解する上で重要なのは、装訂のヒエラルキーを知ることである。特殊な用いられ方をした折本と、鎌倉以降あまり用いられなくなる粘葉装を除外して考えると、「卷子装 > 綴葉装（四半本 > 六半本） > 袋綴」のようになる。同一作品の場合、格の高い装訂に保存されている方が、本文の信頼度は高いと言え、ことに卷子装は清書や献上・奉納の目的で使用されることが多く、特に注目すべき存在である。ただし、著者の草

稿や学者の手控えなどは質素な袋綴が普通なので、注意は必要である。

装訂のヒエラルキーを応用する上で障害となる事柄がある。利用しやすくするためだけでなく、古写本の価値を高める為に、江戸時代以降に改装が盛んに行われたのである。

卷子装と折本は構造的に行き来が可能であり、利用目的でしばしば改められた。この他に比較的目にするのは、綴葉装と袋綴が卷子装に、袋綴が綴葉装に改装される事例である。これらは基本的意一方通行で、その逆はない。ヒエラルキーの低いものから高いものへと、かなり手を掛けて改めているのである。文学作品に限定すると、古写の卷子装はそのほとんどが改装であり、卷子装の格の高さを良く示しているのである。

### 版本の留意点あれこれ

このように様々な装訂のものが存在している和本だが、卷子装や粘葉装・綴葉装などのものは、公家や大名・寺社・豪商などの旧蔵書では普通に見掛けるものではあるものの、下級武士や町人・農民などが所有していた書物は、袋綴と折本が中心である。ことに袋綴は、大量に生産された江戸時代の版本で、主に用いられた装訂であるので、写本を含めてその残存数は膨大である。必然的に出会う機会も最も多いのだが、この袋綴の版本を理解する上で重要なのは、判型を識別することである。写本の時代では、袋綴の大きさは、明確な規格を確認できないのだが、商業出版の確立とともに、判型意識が生まれたのである。それは材料となる紙の規格と深く連動するものであった。

版本に利用される紙には、二つの規格、美濃判(27.3×39.4 cm)と半紙判(杉原紙の半分, 24.2×33.4cm)があった。産地の違いや年代による変化もあり、紙の厳密な大きさを示すことはできない。ここで上げる数値は、一つの目安とご理解いただきたい。

美濃判を二つ折りにしてできるのが、版本の基本の大きさとなる、「大本・美濃判本」(約27×19 cm)である。その半分の大きさのものが「中本」(約19×13.5 cm)である。半紙判を二つ折りにしたのが「半紙本」(約24×16.5 cm)であり、その半分の「小本」(約16.5×12 cm)である。大本より大きなものが「特大本・大美濃判本」で、小本よりも小さなものを「特小本・豆本・寸珍本・雛本」などと呼ぶ。以上を大きい順に並べると、「特大本>大本>半紙本>中本>小本>特小本」ということになる。

この縦型本の規格と連動して、横型本(横本)の規格

も存在していた。縦型の判型を基本にし、高さが何分の一かで区別したのである。高さが半分が「二つ切本」で、高さ三分の一が「三つ切本」、四分の一が「四つ切本」である。基本の判型と組み合わせて、「大(美濃)三つ切」・「半紙二つ切」などという風に呼ばれたのである。

紙は基本的に高価であるので、大きな本ほど高級ということになる。大本は版本の基本的な大きさで、江戸初期から仏書・漢籍・和書など様々な内容がこの形で刊行された。商品としての版本の大衆化が進む中で、小さな本が増えていくが、一般的に小さくなるほど俗っぽくなる傾向があった。横本は一度に沢山の情報量を見るのに便利であるので、ガイドブック的なものや、辞書類や韻文の類例集などでも良く用いられた。版本では折本も、書道の手本類や携帯型の実用書類などで良く用いられている。

内容と判型の相関関係ができあがると、わざとこれをずらすものも作られ、同一の作品でも複数の判型を有するものも生まれる。版本は判型に注目することが大切なのである。

ただし、版本に用いられた和紙は、江戸時代を通じて次第に小さくなるため、版本自体も徐々に小さくなっており、江戸初期と末期では大本だと1 cm以上の差がある。同じ版木のもの刷の前後を考える上で、大きさは重要な情報であり、ミリ単位での実寸を記録することが重要となる。

江戸時代の版本書肆には、学術書中心の「物之本屋」と、絵の多い俗書を中心とする「地本(問)屋」があり、大きさや造本に傾向があるので、その識別も大切である。

日本の商業出版は、活字印刷によって確立すると言える。その近世初期の約半世紀間の活字印刷物である「古活字版」は、希少で学術的な価値も高い。活字か否かの識別は特に平仮名版では難しいが、幾つかのポイントを抑えれば確認もしやすくなる。

### 和本をめぐる諸問題

写本・版本に共通する和本の大きな問題は、特に平仮名系の作品で、書名がはっきりしないものが多いことである。表紙にある題を「外題」、内側にある題を「内題」と言うが、内題にはその存在場所の違いにより複数の種類がある。和本には様々な事情で全く書名を有さないものもあれば、外題と内題が異なったり、一冊の中に複数種の書名が存することもある。これは、執筆の段階から正式な書名が付されていなかったことに起因すると考えられる。無書名では不便であるので、作品の伝来過程で様々な仮の名付けが行われたのである。無書名でも写本

であればどうにかなるが、商品としての版本では無名は許されない。判りやすく購買意欲をそそる書名が、推定された信頼度の低い作者名と共に刻されることが多かったのである。また古典的作品・新作に拘わらず、一度刊行した本を、版木の題名部分だけ刻み直して、再度売り出すことも普通に行われている。

目録情報を著録する際に、書名が見当たらない場合や、信頼度の低い書名しかない場合、あるいは複数の異なる書名を有する場合などに出会った際に、どのような対応をすればよいのかは悩ましい問題である。方針次第であるとはいえ、その本を見たい欲する可能性のある人物の、検索や理解に適したあり方を考えるのが望ましいことは確かであろう。

その本の製作状況を明らかにする情報として、写本の奥書・識語、版本の刊記・奥付は貴重である。その双方に共通するのは、その情報には、製作時点で加えられたものと、古い情報をそのまま保持しているものとの2種があるということである。その識別はなかなか難しいが、それを区別せず情報提供することが混乱を招くことも少なくない。少なくとも、本の有する情報を鵜呑みにしてはいけないことを意識することが大切であろう。

その本の製作者や製作時期、伝来の過程といった重要な情報を教えてくれる存在ではあるものの、判読の難しさから敬遠されがちなものに蔵書印がある。関連工具書も増え、インターネットも普及した現在、その把握は格段に行いやすくなっているのである。

## おわりに

かなり多岐にわたってしまったが、和本を管理する立場になった際に、利用者の便を考えた書誌情報の把握と、それを提供するために必要となると思われるポイントを挙げてみた。当日は、画像を多用しつつ、できるだけ具体的に判りやすく説明していきたい。

---

### 【事例報告】

#### 和古書を開架で―「保存と利用」から活用へ― 田中麻巳（立正大学古書資料館）

---

### 1. 立正大学古書資料館とは

立正大学古書資料館（以下、「古書資料館」）は、江戸時代の和古書を中心に、貴重書、特殊資料（卷子本・折本・函物等）、洋古書を所蔵する、古書の専門図書館である。立正大学附属中学・高等学校の移転に伴い、旧中

高図書室を再利用して2014年に開館し、蔵書の約8割を開架で提供している。利用者は、古書を扱うためのマナーを守りながら、開架室で書架から資料を直接取り出し、閲覧することができる。

立正大学が日蓮宗の教育機関を母体としているため、1万タイトル約4万5千冊の蔵書の約7割は仏教関連資料だが、地理や文学等これ以外の分野の資料も多数所蔵している。資料形態も、線装本を中心に、巻物や折本、横長本、一枚物、豆本等、様々である。このような蔵書を通して古書に親しんでいただき、古書の魅力をより多くの方に知っていただくことも古書資料館の目的のひとつである。古書の魅力を知るとは、古書を大切に取り扱い扱うという気持ちにつながると私たちは考えている。本稿では、以下、当分科会のテーマである和古書を中心に述べていく。

### 2. 古書資料館の誕生まで―保存と利用の狭間で―

和古書を所蔵している図書館は、一般的に閉架書庫で管理している。2014年に古書資料館を開館するまで、立正大学においても、和古書は大学図書館の閉架書庫の奥の和装本コーナーに大切に保管していた。そのため、利用可能な資料としての存在が見えにくく、学生の利用は卒論で原資料の確認が必要となったときなどが主で、通常は研究者や大学院生が利用の中心であった。閲覧利用する際も、事前に予約するなど色々な制約と手続きがあり、利用まで何段階かのステップを経なければならず、和古書利用への距離感の一因となっていたと考えられる。和古書を大切に保管して次世代に伝えることも図書館の重要な責務であるが、その一方で、代々の担当者には、長年常に問い続けてきた和古書への思いがあった。それは、「資料は何のためにあるのか」、「図書館の役割とは何か」、「図書館における保存とは何か」という図書館の基本的な問題である。私たちは、古書資料館を開架利用中心にした場合の課題を、「資料の保存環境は維持できるか」「開架ならではの新しいサービスをどのように提供するか」の2点に絞り検討を重ね、「保存」と「利用」という一見相反する命題に悩みながらも、「資料を現在と未来に保証し、これまで以上に利用の可能性を高めていくことの両立」を目指して、2014年、開架中心の古書資料館誕生に至った。

開館後、スタッフは、資料の保護・保存業務(毎日の温湿度計測、清掃、環境調査、帙作成、デジタル化、補修、中性紙アーカイバルボードの活用等)を着実に実施し、利用者には、古書資料館独自のマナーやルール(筆記具は鉛筆のみ使用可、手を清潔にしてから閲覧等)を徐々に

浸透させていった。これは、現在も和古書開架提供のための2本柱となっている。

### 3. 和古書利用支援の取り組み

「和古書」というと、学生や古書に馴染みのない方々には、難しい、敷居が高いというイメージがあるようだ。そこで、多くの方に和古書を利用していただくために、古書資料館では、2つの特徴ある利用支援を行っている。

1つ目は、前述の通り、利用者が直接書架から和古書を取り出して利用できるという点である。この利用者が和古書に囲まれ蔵書全体を見渡せるといった環境自体が、利用の主体性を促す支援だと私たちは考えている。利用開始時、まず古書の取り扱いを覚えていただくが、この時点での説明は、その後の利用者の古書へ向かう姿勢を方向付けるといっても過言ではないほど効果的であった。カウンターにて所定の手続きを経た後は、一般の方の利用も可能である。

2つ目は、和古書の研究と学習を支えるスタッフが常駐しているという点である。古書資料館では、カウンタースタッフが常時2名、ライブラリアン(職員)が1名、専門員(教員)が1名で対応している。基本的な利用サービスや案内はカウンタースタッフがを行い、レファレンスはライブラリアンと専門員の連携で行っている。これは、古書資料館の蔵書(古書資料)が一般図書と異なり、文字を読むこと自体にかなりの頻度で指導やアドバイスを求められるという特殊な状況にあることが大きい。そのような場合の多くは、ライブラリアンの対応範囲を越え学習指導に発展していくため、専門員を配置することで最後まで対応可能となっている。「初心者からリピーターまで」「学習指導から研究支援まで」「個人利用からグループ利用まで」「授業から生涯学習まで」など、多種多様な利用目的に沿って適切な対応をとるためには、ライブラリアンと専門員がそれぞれ役割分担をしたレファレンス体制が重要だと考えている。

### 4. 和古書の「保存と利用」から活用へ

和古書の魅力を知ってもらい、より有効に活用してもらうためには、古書資料館の存在とその所蔵資料の魅力をさらに広く知ってもらうことが必要なのではないか、という観点から、開館後は広報が課題となった。そこで、広報の場を学外へも広げ、図書館総合展やIFLA年次大会等のイベントでのPR、図書館関係の雑誌への投稿、外部イベントとの積極的な連携を行い、古書資料館の存在の周知に努めている。同時に、和古書の利用が促進されるよう、前述の利用支援サービスの提供はもち

ろん、展示、和古書に親しむ講座の開催、資料の継続的収集等を行い蔵書の充実を図っている。その結果、徐々に、他機関への所蔵資料貸出や授業、生涯学習において等、和古書の多様な活用が見られるようになった。

### 5. 古書資料館の今後に向けて

古書資料館では、「和古書の魅力を伝え、より有効に活用してもらうこと」という基本方針に則り、新たな活動を加えながら成長していきたいと考えている。

まず、和古書の活用事例や、質問への回答事例を伝えることが次の利用に繋がっていくと考え、ライブラリアンと専門員によるこれまでの和古書のレファレンス事例を、国立国会図書館レファレンス協同データベースに登録し、公開を開始した。これにより、和古書のレファレンス情報を共有していきたい。

次に、和古書の講座等を今後も開催し、古書資料館や蔵書の更なる有効活用に繋げ、継続的な学び、生涯学習の支援の拠点となるよう、地域密着型のサービスの充実を図っていきたい。

また、古書資料館では資料のデジタル化もを行い、一部の資料についてはホームページから利用することが可能となっている。アーカイブや利便性にも継続して対応すると同時に、今後も原本を手にとってこそわかる情報の提供を大切にし、和古書原本の魅力を感じ活用し続けてもらうため、たゆまぬ努力をしていきたいと考えている。

---

#### 【実演】

##### 和本の取り扱いと簡単な補修

眞野節雄(東京都立中央図書館)

新井浩文(埼玉県立歴史と民俗の博物館)

---

貴重な資料が多い和本(和装本)。必ず白手袋をして取り扱わねばならないと思いませんか。立てて書架に並べていませんか。また、小さな補修でも絶対に触ってはいけないと思いませんか。

和装本の装備・配架も含めてその取り扱いについて、図書館員として知っておきたい最低限の知識を学びましょう。冊子本を中心とした一般的な注意事項から巻物(卷子)の取り扱いについても知っておきましょう。

また、補修についても、簡単なものであれば図書館員にもできる場合があります。「皺伸ばし」「継直し」「糊差し」、袋綴じの「綴じ直し」など。しかし、守らなければならない注意点があります。それらについて解説・実演します。